

がん早期発見の仕組みを

がん社会 を診る

中川 恵一

ています。がん検診の受診は「国民の努力義務」と言えるでしょう。

ところが膀胱(すいぞう)がんは国が定めるがん検診の対象になっていません。5年生存が1割程度と難治性のこのがんは増え続けており、私が生まれた65年前の20倍になっています。膀胱がんによる死亡数は2023年に胃がんを抜いて第3位となりました。

交通事故による死亡を避けるには「安全運転+シートベルト」。同様に、がんによる死亡を避けるには「生活習慣+がん検診」が必要です。

前回も書きましたが、国は健康増進法をもとに、胃がんと肺がん、大腸がん、乳がん、子宮頸(けい)がんに対する「住民がん検診」を推進しています。

この法律の第二条では「国民は、自らの健康状態を自覚するとともに、健康の増進に努めなければならない」とし

がんは一種の老化ですか



イラスト 中村 久美

ら、膀胱がんの急増の主因は高齢化です。ただ、生活習慣の欧米化も重要で、糖尿病は膀胱がんの発症リスクを約2倍に増やします。特に血糖値が急上昇した場合は、このがんを疑う必要があります。

遺伝も無視できない要因で、親兄弟に膀胱がん患者がいる場合は要注意。乳がんや卵巣がん、前立腺がんと同様、遺伝的要素が大きいことも知ってほしいと思います。

膀胱がんの急増は欧米でも同様です。患者数がさほど多くない、安価で簡便な検査方法がない、早期発見による死亡率の低下のエビデンスがない、などが理由とされます。ただ、私は膀胱がんの増殖速度の速さも重要なポイントだと考えています。

多くのがんは1センチになるのに10〜20年の年月を要しますが、1センチが2センチになる

のは、1、2年です。1〜2センチの早期がんで症状はまず出ませんから、1、2年ごとに検査を受ける必要があります。

実際に胃がんと乳がん、子宮頸がんは2年毎、肺がんと大腸がんは毎年の検査が推奨されています。

私の経験でも、早期の膀胱がんが転移を伴う進行がんになるまでの期間は、多くのケースで数カ月〜半年程度です。

人間社会は地球が太陽を一回りする1年が基本単位です。1〜2年で進行するがんが多いのも事実ですが、膀胱がんは1年毎の検査では間に合いません。膀胱がんの成長速度に合わせた頻度で検査を行うしか早期発見はできません。逆に、大きくなるのに何十年もかかるがんは、過剰診断が問題になります。

住民検診とは別の仕組みが必要だと考えています。

(東京大学特任教授)